

文語日誌(平成二十六年七月二十八日)

三省堂八階の催物會場にて開催せられたる古書市にて大町桂月注釋「新譯文章規範」(春秋社、明治四十三年刊)を購入す。

「文章規範」は南宋の謝枋得(一二二六年生)の編纂による模範的名文集なり。高級官吏登用試験たる科擧を受験する際の参考書として知らる。我が國幕末の志士も之を愛讀の由。

大町桂月、序に曰く、「謝豊山の編める文章規範は支那の文章の精を抜きたるもの也。二十年以前までは漢籍を學ぶ者は何人も讀まざるは無かりき。然るに一般の教育上漢籍の勢力衰ふるにつれて、文章規範を讀むものも少くなりたるは大に惜むべきことならずや」と。百年以上前にしてかくの如き狀況なれば、況や今日におきてをや。

「文章規範」は八卷より成る。一、二卷は放膽集(自由に思ふ通りに言ひたきことを述ぶる筆法)、三卷より八卷までは小心集(字句に注意を拂ひ婉曲に表現する筆法)なり。

唐宋名家の作品中心にて、全體六十九篇のうち、韓愈(七六八年生)は三十二篇と最多なり。本書冒頭の「于襄陽に與ふる書」など仕官を求むる内容のもの多し。「七月三日將士郎守國子四門博士韓愈、謹んで書を尚書閣下に奉ず。」以下略。

韓愈に次ぐは蘇東坡(一〇三七年生)にて十二篇を占む。就中「前赤壁の賦」は著名なり。「壬戌の秋、七月既望、蘇子、客と舟を泛べて、赤壁の下に遊ぶ。清風徐に來り、水波興らず。酒を擧げて客に屬し、明月の詩を誦し、窈窕の章を歌ふ。」以下略。

古き時代の作品としては、諸葛孔明(一八一年生)の「前出師表」及び陶淵明(三六五年生)の「歸去來辭」も収録せられる。

「前出師表」は、昨年十一月の文語シンポジウムにて岡崎久彦先生の暗誦しつつ朗讀せられたる名文中の名文なり。「臣亮言す。先帝創業未だ半ばならずして中道に崩す。今天下三分し、益州罷弊す。此れ誠に危急存亡の秋なり。」以下略。「危急存亡の秋」なる表現、はるかに時代を超え今日にても屢使用せらるることは讀者諸氏の知る通り。

「歸去來辭」も名文なり。「歸りなんいざ、田園將に蕪せんとす。胡ぞ歸らざるや。既に自ら心を以て形の役と爲す。」以下略。文章規範の最後を飾るに相應しき作品ならずや。(文章規範は仕官を求むる作品に始まり、仕事をば引退する作品を以て終る。)

なほ、明治書院より新書漢文大系九として「文章規範新版」發行せられたり。主要作品の現代語譯を含み、我々世代には讀解のよき助けとなる。